

# 児童養護施設の職員が、 専門職として支援ができる 環境をつくりたい。



福祉貢献学部  
**谷口純世** 准教授

【学歴】  
1996年3月 上智大学文学部社会福祉学科卒業  
1999年3月 上智大学大学院文学研究科社会学専攻博士前期課程修了(社会福祉学修士)  
2001年3月 上智大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程中途退学

【職歴】  
1996年4月 社会福祉法人コドモの園 東京育成園(児童養護施設)常勤児童指導員(1998年3月まで)  
2001年4月 聖母女学院短期大学児童教育学科講師  
2004年4月 愛知淑徳大学医療福祉学部福祉貢献学科講師  
2008年4月 愛知淑徳大学医療福祉学部福祉貢献学科准教授  
2010年4月 愛知淑徳大学福祉貢献学部福祉貢献学科准教授

谷口先生は「ミッションスクールの中学生だった時、人種差別問題を描いた映画を見て、なぜ差別や貧困が起きるのか疑問に思い、福祉に関心を持ったそうです。福祉を学ぼうと進学した大学で児童養護施設へボランティアに訪れ、子ども家庭福祉学を専門とすることに。その後、大学院と平行して、児童養護施設で週3回の宿直を含む週6日間の勤務を2年間継続。実際に職員の仕事の大変さを痛感したことで、職員の、特に心の負担を軽減できるような研究に取り組み始めました。子ども家庭福祉学の中でも児童養護に関わる領域は、子どもへの支援、家庭への支援、地域への支援など、全てにおいてこれから研究を深め発展させていく部分がまだまだたくさんあります。先生は、児童養護施設職員との学習会や研修会にも積極的に参加。「職員さんたちが、自分たちのなさっていることが単なる家事育児ではなく、子どもと家庭への支援であり、その関わり一つひとつに意味があるのだと感じられるような研究をしたい」と抱負を話していました。



【谷口先生の主要著作リスト】(全て共著)  
「里親養育を知るための基礎知識」明石書房 2005年  
「子どもと家庭の支援と社会福祉」ミネルヴァ書房 2008年  
「養護原理」ミネルヴァ書房 2008年  
「児童家庭福祉」ミネルヴァ書房 2010年  
「里親になる人のためのワークブック」ミネルヴァ書房 2011年(訳本)

**子ども** 家庭福祉学が専門です。この中で、私は児童養護施設という施設での支援について研究しています。児童養護施設は、昨年タイガーマスク運動で話題となり、皆さまもよくご存知かと思いますが、養育者の死亡・離婚・心身の障害・服役・依存症や、養育者からの虐待など、さまざまな理由によって家庭で暮らすことができない子どもが生活している施設です。

**大学卒業後に就職した児童養護施設**で子どもたちと生活し、子どもたちがそれまでのさまざまな環境や経験によって、大きな影響を受けているのを感じました。出会う大人がどこまで自分を受け入れてくれるか何度も試さずにはいられなかったり、掃除の習慣のない環境で育つために箒を渡されて「どうしてオソージつてるの?」と尋ねてきたり、お金で物を買うという経験がないことからお店のものを悪気なく持ってかえってきてしまったり、虐待を繰り返され

たにもかかわらず家に帰る日を待ち望んでいたりと、それまで想像もしていなかった子どもの姿に出会いました。

**子どもを養育できないとは、親は**何をしているのだと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、子どもたちの保護者との出会いのなかで、ご自身が心身の疾患でとても辛い思いをなさっていたり、子育てサポートが誰からも得られないまま子どもがなぜ泣きやまないのかわからずに、気づいたら自分も泣きながら子どもに手を上げていたりなどといった状況があることも教えていただきました。

**児童養護施設職員が日々おこなっている支援も、一見、家庭における家事や育児と変わりないように見えます。けれども、こうした子どもや保護者一人ひとりのニーズに応じた支援を展開することはやはり難しいほど深く難しいことであり、子どもと保護者のこれからの人生をつくるとても大切なプロセスでもあります。**

**私**には子育ての経験はありませんが、現代社会のなかで子どもを家庭で育てられなくなるということがいかに簡単に起こりうるかということはいかに分かります。また、こういった子どもたちや保護者を支える職員の心身の疲労はとても大きなものです。けれども、子どもの家庭環境をより良く整えられるよう、また、職員のスプレスを少しでも減らし質の高い支援を展開できるように、これからも教育・研究を続けていきたいと思っています。